

学校法人 仙台育英学園 秀光中等教育学校

二〇一六年度 東京選抜試験

国語

(第一問～第三問)

注意

- ・試験開始の合図があるまで、問題用紙を開かないこと。
- ・この問題冊子は十四ページあります。
- ・答えはすべて解答用紙に記入しなさい。

第一問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

X

毎日の生活では意識しませんが、人間は、「これは起こり、これは起こらない」「こうすればこうなる」というたくさんの予測を行いながら生活しています。その予測を「信念」とよぶことにしましょう。

I、駅の構内で、柱にぶつくと痛い目にあう、という信念があるから、柱を避けて歩くわけです。空中からハトは出現しない、というのも、わたしたちがもっている信念のひとつです。イヌやネコでも、ある種の信念をもって生活しているようにみえますから、このような経験的信念は、生存に直結した能力といふべきものでしょう。

奇術は、このような日常生活を支えている経験的信念に真っ向から挑戦します。ふつう、奇術のあとで奇術師がタネを明かす、ということはありません。観客は、不思議な現象をみせられて自分の常識が崩された精神状態のまま、放り出されてしまいます。

タネがまったくみえない場合、タネがあるかどうか、どうやって判断するのでしょうか。奇術であることが最初からわかっている場合は問題ありません。奇術を行うほうが奇術であることを認め、観客も奇術であると信じている場合、信頼関係が成立して、心おだやかに奇術を楽しむことができます。しかし、古代の呪術師のように、タネがあるといわないで不思議な現象を起こした場合、それが奇術であるかどうか、自

分で判断するしかありません。

判断力の多くは、過去の経験に依存します。毎日の生活は、正しい経験的判断の上に成り立っていますから、経験的に得た信念は正しいことが多いはずなのですが、不思議な現象をみせられると、自分の信念がゆらぐ場合があります。

一九七四年に超能力でスプーンを曲げるというアメリカ人が来日したことがあります。スプーンを曲げるというような、実用の役に立たない、たわいない現象は、^①いかにも奇術と思わせるものですが、マスクミが「超能力である」と大々的に宣伝し、日本社会に超能力ブームが起きました。

当時、わたしも II でテレビの特集番組をみました。

番組には、まず、くだんのアメリカ人が登場し、スプーンを曲げてみせたあとに、科学者が登場して、超能力か、奇術か、論争しました。出演者のひとりには、「いままでの自然科学は、何でも疑うことを前提に議論を進めてきた。

III、疑っ

てばかりいては、新しい発見は生まれません。自然科学の原点は、先入観をもち、現前で起こったことを素直に事実として認めて、そこからスタートすることである。スプーンが曲がったのは疑いもない事実なのだから、それを前提として議論を始めようではないか」という、^②一見、もっともらしい意見を述べていました。

それに対して、東京工業大学（当時）の桶谷繁夫という金属学の専門家は、真っ向から反対の意見を唱えました。彼の意見は、「指でこするだけで、鉄は曲がりません。タネはわ

からないが、奇術に決まっている」というものです。桶谷氏は、頭から奇術と決めつけていました。まさに、先入観注2のかたまりのような意見でしたが、わたしには、こちらの意見に説得力を感じました。もともと、桶谷氏が金属学の権威注3であるということもありますが、その意見を聞いて、自然科学とは信念である、と思ったのです。

「自然科学は信念である」というのは、語弊注4のある表現です。現代の自然科学のルーツは、ルネサンス期に始まった西洋の自然科学革命にあります。「それでも、地球は回っている」といったガリレオ・ガリレイの言葉を思い出してください。

A

それまで、西洋世界を支配していたキリスト教の教義に基づくとドグマ注5的な自然観が、経験と観察を根拠こんきょにした自然観に変化したのです。この意味では、自然科学は、宗教的な信念ではなく、経験を土台にしています。しかし、その経験は、スプーンが目の前で曲がるのを見る、というような個人的な経験とはちがうのです。自然科学の土台にあるのは、多くの研究者によって踏み固められた経験の集積注6です。

これに対し、個人の経験には、視覚による認識が大きな比重を占めています。「Seeing is believing」という英語のことわざがあります。「IV」と訳されますが、「見ることは

信じることだ」という直訳とは、ニュアンスが少しちがうような気がします。信じるとは、目の前に起こったことが本当である、と思うことです。英語では、「理解した」という意味で、「I see」ということがあります。見ることは、理解することに通り、理解したことは信念につながっていくというわけです。ところが、視覚が絶対に正しいともいえない場合があります。

そのおもしろい例が、ラマチャンドランの『脳のなかの幽霊』という本の中に紹介されています。著者は、脳障害者の治療を通して、大脳の機能を研究しているお医者さんです。この本の中で、交通事故で大脳を損傷そんしょうした自分の患者かんじやのことを書いています。その患者には幻覚げんかく症状が現れるのです。どんな幻覚が現れますか、と著者が聞くと、「先生の膝ひざの上でサルが座っています」といいます。「なぜ、それが幻覚とわかるのですか」と尋ねると、「ふつう、サルを膝に置いて患者を診みるお医者さんはいないと思いますので、幻覚と判断しています。しかし、このサルは、色あざやかにはっきり見えるので、見ただけでは、幻覚かどうかわかりません」という意味のことを答えます。もちろん、大脳が正常であれば幻覚症状は出ないのですが、この例は、^⑤視覚が大脳のつくり出している映像であることをよく示しています。

視覚とは、網膜もうまくがとらえた可視光線かしかうせんによる情報をもとにして、外界がいがいの映像をつくり出す大脳の作用です。あまりにうま

(答えはすべて解答用紙に記入しなさい)

く外界を再現しているので、ふつう、視覚を映像とは思いませんが、実は、精巧せいこうにできた仮想現実かそうげんじつなのです。

哲学てつがくの中には、仮想現実を強調するあまり、現実世界は人間のつくり出した観念である、と考える極端きょくたんな考え方がありますが、自然科学は、その考え方を取りません。自分がいなくても、外界は存在します。

B

自然科学は、大勢の研究者による注意深い観察と論理的な思考によって、個人の視覚が認識できる以上に、正確な外界注8の描像びやうざうをみせてくれます。その描像注9を体系的に説明したものが、物理学であり、化学であり、生物学なのです。その意味で、自然科学は、大勢の人が協力してつくり上げた信念の体系です。

C

わたしは、その意見に深く感銘かんめいし、その番組をみたあと、これからは自然科学の信者になろう、と決心しました。

この決心によって、神秘現象に対する興味が失われ、奇術に対する興味が失われたか、というと、そういうわけではありません。その反対に、自然科学を受け入れることによって、^⑥あらゆることが不思議に感じられるようになりました。

振り返って考えると、わたしたちの日常経験は、不思議なことを当然のこととして受け入れてしまう傾向があるように

思えます。それは、奇術をみせられても、当たり前のこととして受け入れてしまう観客と似ています。^{注10}造化の神が奇術師であれば、いくら手の込んだ奇術をみせても感動しない人間をみて、気が滅入めいいってしまおうでしょう。ところが、自然科学の信念をもとにして身のまわりのことを吟味ぎんみし始めると、日常経験では説明できないことが実に多いのです。

D

たとえば、肉のことを考えてください。肉屋さんで買った肉は、冷蔵庫や冷凍庫に保管します。部屋の中に置いておくと、腐くさってしまうからです。大気中にはバクテリアがたくさんいて、肉の材料であるタンパク質を分解してしまうためです。

しかし、考えてみると、自分のからだもタンパク質できているではありませんか。それが三七度近い温度に保たれています。それにもかかわらず、腐くさることがありません。もちろん、自分が生きているから腐らないのです。生きていくということは、肉を適当に温めて腐りやすい状態に保ちながら、しかも、腐らせないということなのです。

これは、不思議なことであると思いませんか。人間は、ただ生きているだけで、実に不思議なことを行っているわけです。そのことを考えると、人間は生きているだけですばらしい、という気持ちになります。

(木村龍治「自然をつかむ7話」)

注1 呪術師……神仏に祈ったり、口で何かを唱えたりして、超自

然的な現象を起こさせる人。

注2 先入観……当初からの思いこみ。

注3 権威……その方面の知識・技術について他から模範とされる人物。

注4 ルーツ……物事の根元・起源。

注5 ドグマ……キリスト教の独自の教え、考え方。

注6 集積……多量に集まること。

注7 ニュアンス……言葉の意味の微妙なちがひ。

注8 描象……像を描くこと。また、その像。

注9 体系的……一つ一つ別々なものを一定の規則でまとめたもの。

注10 造化……天と地すべての物を作り出し、育てること。また、それを行う神。

注11 吟味……内容・品質などを、ていねいに調べること。

問一 I、IIIに入れるのに最もふさわしい語を次の

A～Eから選び、記号で答えなさい。

I ア おそらく イ たとえば

ウ まったく エ ずっと

III ア つまり イ そして

ウ また エ しかし

問二 IIに入る四字熟語として最もふさわしいもの

を次のA～Eから選び、記号で答えなさい。

A 全知全能 イ 全身全霊

ウ 完全無欠 エ 半信半疑

問三 Xの段落部分に小見出しを付けるのに、最もふさわ

しいものを次のA～Eから選び、記号で答えなさい。

A 信念をゆるがすもの イ 判断力とはなにか

ウ 毎日の生活と現象 エ 古代の奇術師と自分

(答えはすべて解答用紙に記入しなさい)

問四 ——— 線①「いかにも」、④「語弊のある」の意味と

して最もふさわしいものを次のア～エからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

① 「いかにも」

- ア そんなふうに
- イ どこから見ても
- ウ あれこれ
- エ ないくらいに

④ 「語弊のある」

- ア 適当でない言葉を使ったため相手に誤解を与える。
- イ 言い方が適切であるため相手と親密度を増す。
- ウ 適当な言葉が探せないため相手に不快感を与える。
- エ 言い方がいい過ぎるため相手との関係が遠くなる。

問五 ——— 線②「もっともらしい意見を述べていました」

とありますが、どんな点を筆者は「もっともらしい」としているのですか。その説明として最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 疑いを解決することから新しい発見を生み出そうとする点。

イ スプーンが曲がった事実を明らかにしようとする点。

ウ 目の前の現象を素直に認めることから考え始めようとする点。

エ 「信念」に基づいて超能力か奇術かを判断している点。

問六 ——— 線③「その意見」とありますが、意見を述べて

いる文章の最初と最後の三文字をそれぞれ書き抜きなさい。

問七 IVに入れるのに最もふさわしい格言・ことわざ

を次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 「論より証拠」

イ 「案ずるより産むが易し」

ウ 「百聞は一見にしかず」

エ 「火のないところに煙は立たぬ」

問八 ——— 線⑤ 「視覚が脳のつくり出ししている映像であること」とありますが、その「視覚」の説明として、**適切でないものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。**

ア 視覚は、網膜がとらえた可視光線による情報をもとにしている。

イ 個人の経験では、視覚による認識が大きな比重を占めている。

ウ 幻覚とは、視覚がうまく外界を再現したものである。

エ 視覚は、精巧にできた映像であり仮想現実である。

問九 本文には次の一文が抜けています。これを入れるのに最もふさわしいのはどこですか。本文中の A～D から選び、記号で答えなさい。

・桶谷氏は、目の前で起こった現象よりは、金属の性質に対する自然科学の信念を正しいと思われたわけです。

問十 ——— 線⑥ 「あらゆることが不思議に感じられるようになりまし

た。それ

第二問 次の文章は、十一歳の女の子である「私」と、その家のお手伝いさん(家政婦)であるキリコさんとの交わりを、回想的に描いたものです。キリコさんは「私」の両親

やほかのお手伝いさんとは違って、「私」が物語などの文章を書くことを大切に、応援してくれていました。また、「私」の母親には内緒で、キリコさんと歯医者さんの帰りに喫茶店でチョコレートパフェを食べたことなどを、「私」は秘密のこととしてノートに書いています。それに続く本文をよく読んで、あとの問いに答えなさい。

私たちがもっと重要な秘密を共有するようになったのは、学芸会の前日に起きた、ちょっとした事件がきっかけだった。私はメヌエットのソロを、リコーダーで吹くことになっていた。百人の五年生の中から、たった一人選ばれたのだ。

幕が上がり、拍手がおさまると、私は舞台の中央に歩み出してお辞儀をする。スポットライトが当たり、伴奏の子がピアノの鍵盤に指をのせ、みんながリコーダーを見つめる。講堂が静まり返って観客たちの期待が頂点に a の確かめから、私は指を最初の音ソに合わせる。——— ① リハーサルではそうなる予定だった。

家へ帰って、最後にもう一度だけ練習しておこうと思い、ランドセルを開いたらリコーダーがなかった。学校へ引き返し、教室から廊下、運動場まで歩き回り、通学路を三往復し

(答えはすべて解答用紙に記入しなさい)

たが無駄だった。

やがて日が沈み、あたりは真っ暗になった。②リコーダーは何の予告もなく、私の前から消え去り、闇に溶けていったのだ。

途方に暮れた時、どうしていつも母親に頼らなくてはいけないのだろう。一体彼女が何の役に立つというのだろう。

自分が泣いているのは、リコーダーが見つからないからでも、ソロを降ろされるのが嫌だからでもない、よく分かっていた。彼女しか打ち明けるべき人がいないことが、辛いだけなのだ。 A

読みかけの聖書を閉じ、ほつれた綴じ糸をいじりながら彼女は言った。

「新しいのは買いませんからね」

キリコさんが声を掛けてくれたのは、私がセーターも靴下も脱ぎ捨てて、庭の花壇の縁に座り込んでいた時だった。③

「一体、どうしちゃったの？」

「この間読んだ本のヒロインは、夜の風に当たって肺炎を起こしたわ」

「滅多なことで、肺炎になんかなれるもんじゃないわ。それより、笛を手に入れるのが先よ」

「もう駄目。私のリコーダーはどこにもないの」

「ゆっくり、深呼吸して考えてみましょう」

キリコさんは花壇の中からセーターを拾い上げ、枯葉を払

い除けて私に着せた。

「ないんだったら、作ればいいのよ」

「作る？ どうやって？」 B

「木をくり貫いて、穴を開けて、吹き口のところをこんなふうに削って……」

キリコさんは手真似で木を削る格好をして見せた。まるで昔から、何本ものリコーダーを作ってきた人のような手つきだった。

「無理よ、そんなの。無理に決まってる」

「とにかく、まかせておいて。明日の朝、学校へ行くまでに間に合えばいいんでしょ？ さあ、肺炎にならないうちに、早く靴下をはいて、ゆっくり眠りなさい」

私はうなずいて、言われたとおりにした。明日無事にメヌエットの演奏ができる、希望を持ったからではない。 C

「じゃあね」

そう言って手を振りながら、キリコさんはどこかへ走って行った。

キリコさんは約束を破らなかった。次の朝、息を食堂へ駆け込んできた。右手にしっかりとリコーダーを握り締めて。 b

削りたての木の香りがまだ残っていた。口は少し太めで、穴はザラザラし、吹くとどこからか木屑の粉が飛び散ったが、それは間違いなくリコーダーだった。どこから眺めても、真正銘の本物だった。

本番で私の吹くメヌエットは、講堂の冷たい空気を震わせ、観客たちの頬を包み、窓ガラスをすり抜けて空の高いところへ吸い込まれていった。④天によって選ばれ、特別にあつらえられた音だった。

私はノートに書きためた物語から一番のお気に入りを書き画用紙に清書し、リボンで綴じてキリコさんにプレゼントした。

D

後で知ったことだが、彼女は以前勤めていた家具工場の職人さんに頼んで、リコーダーを作ってもらったらしい。正しい音階が出るまで、十本以上やり直しが必要だった。本当は食卓の脚になるはずの木だった。

「ありがとう。とっても素晴らしい物語ね。お城の図書室に住むクマネズミが、ヒキガエルを誘って地下牢を探検する場面がいいわ。ほら、泉が湧き出しているのを発見して、二人が一緒に泳ぐの。ヒキガエルがクマネズミの前脚をしっかりと握って、水かきでおしりを持ち上げてやる、あそこが一番好きよ」

キリコさんは喜んでくれた。そしてますます、私の「書き物」の時間を、大事に扱ってくれるようになった。

お礼にプレゼントしたのがどんなお話だったのか、今ではすっかり忘れてしまった。ただ泉を泳ぐ場面がよかったと言う、キリコさんの言葉を覚えているだけだ。

クマネズミとヒキガエルの物語は、今頃どこでどうしているのだろう。生まれて初めて人を喜ばせた、私の物語。⑤作者の記憶から消え去ってもまだ、世界のどこかで息をひそめているのだろうか。

(小川洋子「キリコさんの失敗」)

注 メヌエットのソロ……メヌエットはフランスで生まれた4分の

3拍子の舞曲。テンポはあまり早くない。ソロは曲を一人で演奏(独奏)すること。

(答えはすべて解答用紙に記入しなさい)

問一

——線①「リハーサルではそうなる予定だった」とはどのようなことですか。その説明として最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア リハーサルでは思いどおりの演奏ができたので、さらに加えて本番では五年生代表としてのふさわしい姿でありたいと考え、それを思いうかべたということ。
- イ リハーサルでは十分な演奏ができたので、明日は会場で聴く人のふんいきや期待がわかるほど、自信に満ちて演奏を始めることができるはずだということ。
- ウ 本番前の大事なリハーサルでは曲の演奏の出来ばかりでなく、あわせて催しの全体を体験すれば、本番では観客を引きつけることができるだろうということ。
- エ 本番前の大事なリハーサルでは演奏への入り方を確認し、あとは自分が思い描くその手順のとおりにより何事もなく終了して、明日の本番に臨もうということ。

問二

——線②「リコーダーは何の予告もなく、私の前から消え去り、闇に溶けていったのだ」の文章に使われている表現技法と同じものが使われている本文中の文章を次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 「自分が泣いているのは、リコーダーが見つからないからでも、ソロを降ろされるのが嫌だからでもない」と、よく分かっていた
- イ 「まるで昔から、何本ものリコーダーを作ってきた人のような手つきだった」
- ウ 「口は少し太めで、穴はザラザラし、吹くところから木屑の粉が飛び散ったが、それは間違いなくリコーダーだった」
- エ 「クマネズミとヒキガエルの物語は、今頃どこでどうしているのだろう」

問三

——線③「私がセーターも靴下も脱ぎ捨てて、庭の花壇の縁に座り込んでいる」とありますが、「私」がそのようなことをする目的は何だと考えられますか。最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

- ア 物語の不幸なヒロインの気持ちを自分も味わいたいため。

イ 肺炎はいえんになることによって、明日から学校を欠席するため。

ウ 肺炎になることによって、冷淡れいたんな母親に仕返すため。

エ 頼たよりになるキリコさんの助けをうまく引き出したため。

問四

——線④「天によって選ばれ、特別にあつらえられた音だった」とはどのようなことですか。その説明として最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 学芸会でのソロは、奇跡きせきによってもたらされ、そしてこの楽器でしか生み出せないすぐれた音色ねいろであったこと。

イ 学芸会でのソロは、運にめぐまれて無事に演奏され、ひきしまった心で吹き鳴らした上々じょうじょうの音色になったこと。

ウ 学芸会での演奏は、澄すんだ空の遠くはるかにまでとどくかのような、このうえなく清らかな響ひびきであったこと。

エ 学芸会での演奏は、観客をうっとりさせるすばらしいものに仕上がり、あたかも天上てんじょうの音楽のようであったこと。

問五

——線⑤「作者の記憶きおくから消え去ってもまだ、世界のどこかで息をひそめているのだろうか」とは「私」のどのような思いを表していますか。その説明として最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア その物語は書いたことさえ忘れていたが、キリコさんの言葉を思い出してなつかしくなってきたということ。

イ その物語はほとんど忘れたが、キリコさんがなくした色画用紙に残されていると想像しているということ。

ウ その物語は一部を除いて忘れたが、確かにあのころの自分が書いたものだと思ふり返っているということ。

エ その物語の生き物はもうこの世にはいないだろうが、なんとなくどこかに生きている気がするということ。

(答えはすべて解答用紙に記入しなさい)

問六

——線「重要な秘密」とはどのようなことだと考えられますか。最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

問八

本文には次の一文が抜けています。これを入れる最もふさわしいところを本文中の□ A～Dから選び、記号で答えなさい。

・彼女を疑いたくなかったからだ。

ア 「私」の物語に登場するお気に入り生き物を、キリコさんも好きになったこと。

イ 「私」が演奏したりコーダーは、キリコさんの知り合いの家具職人が作ったこと。

ウ 「私」に対してやさしくない母親には、二人ともなるべく近づかなかったこと。

エ 「私」の物語をキリコさんが喜んで、書くことをいっそう尊重してくれたこと。

問七

□

a、

□

bに入れる語として最もふさわしいものを次のア～エからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- a
- ア 届いた
 - イ 達した
 - ウ 昇のぼった
 - エ 触ふれた

- b
- ア 殺して
 - イ 継ついで
 - ウ 弾はずませて
 - エ 呑のんで

第三問 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

注1「今昔物語」に三年間土中に埋めておけば人が突かなくとも
b テイジに鳴る鐘の話がある。注2 鋳物師は必ず三年待つよう言い
渡したが、寺の別当はがまんできずに期日前に掘り出してし
まう。もちろん鐘は鳴らず、悪いのは別当ということになっ
た。

鎌倉時代や室町時代に水中に沈められたり、土中に埋めら
れたりした鐘の発掘キロクや伝承は多い。戦乱を避けようと
埋める場合もあったが、そうすることで鐘に特別な力が備わ
るといふ思想があったようである。

自然界にない神秘的な金属音を出す鐘は、水中や土中の異
界とこの世をつなぐ霊的な力があると中世の人々は考えた
らしい。さて、ではずっと大昔の弥生時代の人々は銅鐸の金属
音をどう聞き、またなぜそれを埋めたのか。兵庫県淡路島
での銅鐸の大量出土である。

銅鐸は弥生前期末から中期初頭の七点で、**I** 一点は
最古級の様式という。**II** 内部に振り子状に取り付けて
音を鳴らす青銅製の舌が三点で見つかり、その接触部分は摩
滅していた。**III** 音を出していたとみられ、「見る銅
鐸」ではなく「聞く銅鐸」だったようだ。

銅鐸の中に小銅鐸がはめ込まれた入れ子状をなしていたの
も特徴で、それが舌と一緒に見つかったのは初めてという。

発見場所は一時保管用の砂山で、もとは南あわじ市松帆地区
の田畑に埋まっていた可能性が高い。はてさて弥生人はどん
な思いで埋納したのだろうか。

銅鐸の保存状態はキワめてよいそうである。地中で過ごし
た二千年を超える時を考えれば、もしやひとりでに鳴り出し
はしないかと空想もふくらむ。

(毎日新聞「余録」平成二十七年五月二十二日掲載)

注1 今昔物語……平安時代の人々が伝えた物語などを集めた書物。

注2 鋳物師……とかけた金属を型に流しこんで物を作る人。

注3 別当……寺全体の仕事をまとめる役職。

注4 異界……この世とは別の世界。

注5 銅鐸……大きな鈴の形をした青銅器。

注6 摩滅……すれて、厚さがうすくなること。

問一 ……線 a、e のカタカナは漢字に直し、漢字は読み

をひらがなで書きなさい。

- a 土中 b テイジ c キロク
d 埋納 e キワ

(答えはすべて解答用紙に記入しなさい)

問二 Iに入れるのに最もふさわしいものを次の

ア、エから選び、記号で答えなさい。

ア ここ イ あと

ウ うち エ それら

問三 II、IIIに入れるのに最もふさわしいものを次の

のア、エからそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア しかし イ つまり

ウ また エ さて

問四 線①「承」の総画数は何画ですか。またこの字

の太字の部分は、何画目ですか。それぞれ漢数字で答えなさい。

承

問五 線②「特別な力」とありますが、この時代の

人々が考えた鐘の特別な力とはどのようなものですか。

二十字以内で本文から書き抜きなさい。

問六 線③「様式」の本文における意味として最もふ

さわしいものを次のア、エから選び、記号で答えなさい。

ア 物事の存在や行動のありさま、状態のこと。

イ 自然とできあがった、一定の形式のこと。

ウ 物事を成立させている、基本的なもののこと。

エ 造形物を特徴づける、独自の表現形態のこと。

問七 兵庫県淡路島で出土した銅鐸に関する説明として正

しいものを次のア、エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 銅鐸の内部には、振り子状に取り付けて音を鳴らす部品が数種類見つかり、接触部分が摩擦して

いた。

イ 「見る銅鐸」ではなく「聞く銅鐸」であり、実際に用いたものを地中に埋めて、戦乱を避けようとしたよう

だ。

ウ 発見された場所は南あわじ市松帆地区の田畑であり、この年代のものとしては七点という数は大量と

言える。

エ 銅鐸の中に小銅鐸がはめられた入れ子状をなして、舌ととも

にその形状のものが見つかるのは初めてという。

問八

——線④「地中で過ごした二千年を超える時を考えれば、もしやひとりでに鳴り出しはしないかと空想もふくらむ」とありますが、このときの筆者の思いを説明するものとして、最もふさわしいものを次のア～エから選び、記号で答えなさい。

ア 地中に長く埋められた銅鐸の持つ特別な力を信じた弥生人の気持ちに強く感動している。

イ 淡路島の銅鐸は「今昔物語」の鐘に比べて長い間埋まっていたので、ひとりでに鳴ってほしいと望んでいる。

ウ 不明な点が多い淡路島の銅鐸について、弥生時代の人々に想いをはせて想像を楽しんでいる。

エ 大量に出土した鐘の保存状態が良いのは、実際に使うために弥生人が大切にしたからだと信じている。

(答えはすべて解答用紙に記入しなさい)

